

節分の豆まきと鬼

日本の四季

春は一年の始まり。季節はほぼ毎月ごとにかわる春夏秋冬と進み、また新しい年、春を迎え、毎年、同じサイクルを繰り返するのが日本の四季の変化です

春 2月 3月 4月 立春 2月4日 春分 3月21日

夏 5月 6月 7月 立夏 5月5日 夏至 6月21日

秋 8月 9月 10月 立秋 8月8日 秋分 9月23日

冬 11月 12月 1月 立冬 11月8日 冬至 12月22日

1月の正月が終わり、2月に入ると節分の季節です。節分とは季節を分けるという意味で、季節の変わり目を意味しています。昔から季節の変わり目は邪が入りやすい時期だと考えられていました。

冬から春に季節が変わる節分に、各々の家や大きな神社では「鬼は外！」「福は内！」の掛け声とともに豆まきが行われます。

節分の翌日の立春が暦の上では春のスタート日になりますが、2月はまだ冷え込みの厳しい時期が続きます。しかし、梅や桜のつぼみは次第に大きくなり、春の足音が予感される時期でもあります。

春を知らせる東京の春一番の風が吹き荒れるのは毎年、2月22日頃。毎年、季節は確実に動いているのです。

11月から始まった寒く乾燥した日本の冬がやっと終わりをづけ、人々が待ち焦がれていた春の到来のめどがつき始めるのが2月の節分、立春なのです。春夏秋冬の春が新たにスタートする日。

新しい年のスタート、立春(2月4日)の前日にあたる節分の日(2月3日)に、旧年の汚れ、悪いものを鬼と呼んで、その鬼を追い払い、清らかな新春を迎えよう、皆が健康で幸せに暮らせるように……と「鬼は外！」「福は内！」の掛け声とともに豆をまくのが節分の行事です。

悪いものを追い払い、福を呼び込むために、大豆を使い、豆まきをします。

鬼に炒った豆をぶつけて、悪いものを追い出すというイメージで、ずーっと昔に鬼を豆で退治したところから由来しているそうです。

大豆には、たくさんの栄養が含まれているから、鬼を追い出すパワーがいっぱいつまっているんだって！



節分の豆まきの行事は古代の中国ではじまり、奈良時代に日本に伝わり、平安時代に宮中行事になりました。

中国では旧年の大晦日、節分の日に「旧年の厄や災難を払い清める追儼(ついな・鬼の面をかぶった人を弓矢で追い払う儀式)や鬼遣(おにやらい・鬼を追い払う邪気払いの儀式)が行われていました。

宮中行事の追儼と春夏秋冬の節分に行われていた方違え(かたがえ)行事の「豆打ち」という行事が合わさったものが日本の節分の豆まきの由来です。現在のような豆まきの行事になったのは室町時代で、一般庶民に広がったのは江戸時代だといわれます。

災難や厄(鬼)は鬼門の方向からやってくると考えられています。鬼門とは12支(北は子・ねずみ)の北東の方向。北東の方向は12支では「丑(うし)寅(とら)」になります。

旧年の汚れや悪いものを鬼と呼んでいます。鬼に角が生えているのは、丑(うし)の方向を表す牛の角を、パンツが虎柄なのは寅(とら)の方向を意味する虎を表現するためのものなのです。

ちなみに「桃太郎の鬼退治」の話の中で桃太郎がお供に連れて行った動物は申(猿)・戌(イヌ)・酉(鳥)です。これらの動物は12支では鬼門(北東)・丑と寅の対極の方向(申・戌・酉)を表しています。

